

夏目漱石

漱石小品集

目次

イズムの功過	5
一夜	11
岡本一平著並画『探訪画趣』序	32
カーライル博物館	38
学者と名誉	58
元日	64
木下杢太郎著『唐草表紙』序	70
教育と文芸	81
京に着ける夕	100
虚子君へ	113

ケーベル先生	123
ケーベル先生の告別	133
現代日本の開化	138
琴のそら音	183
コンラッドの描きたる自然について	245
作物の批評	250
三山居士	267
子規の画	273
「自然を寫す文章」	279
自転車日記	284
写生文	307
趣味の遺伝	322
初秋の一日	425
処女作追懷談	431
人生	441
鈴木三重吉宛書簡―明治三十九年	452

イズムの功過

大抵のイズムとか主義とかいうものは無数の事実を几帳面(きちょうめん)な男が束(たば)にして頭の抽出(ひきだし)へ入れやすいように拵(こしら)えてくれたものである。一纏(ひとまと)めにきちりと片付いている代りには、出すのが臆劫(おっくう)になつたり、解(ほど)くの到手数(てしゆ)がかつたりするので、いざという場合には間に合わない事が多い。大抵のイズムはこの点において、実生活上の行為を直接に支配するために作られたる指南車(しなんしゃ)というよりは、吾人(ごじん)の知識欲(ちしきよ)を充たすための統一函(いつい)である。文章ではなくって字引である。

同時に多くのイズムは、零碎(れいさい)の類例(るいれい)が、比較的緻密(ちみつ)な頭脳(づなう)に濾過(ろか)されて凝結(ぎようけつ)した時に取る一種の形である。形

といわんよりはむしろ輪廓(りんかく)である。中味(なかみ)のないものである。中味(なかみ)を棄(す)てて輪廓(りんかく)だけを置(お)き、天保銭(てんぼうせん)を脊負(せ)う代りに紙幣(しへい)を懐(ふところ)にすると同じく小さな人間として軽便(けいべん)だからである。

この意味においてイズムは会社の決算報告(けつ算ほうこく)に比較(ひかく)すべきものである。更に生徒(せいと)の学年成績(がくねんせいせき)に匹敵(ひてき)すべきものである。僅(わずか)か一行(いっけい)の数字(すうじ)の裏面(うらめん)に、僅(わずか)か二位(にまい)の得点(とくてん)の背景(はいけい)に殆どありのままには繰返(くりか)しがたき、多くの時(とき)と事(こと)と人間(にんげん)と、その人間の努力(どりょく)と悲喜(ひき)と成敗(せいはい)とが潜(ひそ)んでいる。

従(したが)ってイズムは既に経過(けいこ)せる事実(じじつ)を土台(どたい)として成立(せいりやう)するものである。過去(かこ)を総束(そうそく)するものである。経験(けいけん)の歴史(れきし)を簡略(かんりやく)にするものである。与えられたる事実(じじつ)の輪廓(りんかく)である。型(がた)である。この型(がた)を以(も)つて未来(みらい)に臨(ま)むのは、天(あま)の展開(てんか)する未来(みらい)の内容(ないよう)を、人の頭(あたま)で拵(こしら)へた器(うつわ)に盛終(もりお)

お)せようと、あらかじめ待ち設(もう)けると一般である。器械的な自然界の現象のうち、尤(もつと)も単調な重複(ちようふく)を厭(いと)わざるものには、すぐこの型を応用して実生活の便宜を計る事が出来るかも知れない。科学者の研究が未来に反射するというのはこのためである。しかし人間精神上の生活において、吾人がもし一イズムに支配されるとき、吾人は直(ただち)に与えられたる輪廓のために生存するの苦痛を感じるものである。単に与えられたる輪廓の方便として生存するのは、形骸(けいがい)のために器械の用をなすと一般だからである。その時わが精神の発展が自個天然の法則に遵(したが)って、自己に真実なる輪廓を、自(みずか)らと自らに付与し得ざる屈辱を憤(いきどお)る事さえある。

精神がこの屈辱を感じるとき、吾人はこれを過去の輪廓がまさに崩れんとする前兆と見る。未来に引き延ばしがたきものを引き延ばして無理にあるいは盲目的に利用せんとしたる罪過(ざいか)と見る。

過去はこれらのイズムに因って支配せられたるが故に、これからもまたこのイズムに支配せられざるべからずと臆断(おくだん)して、一短期の過程より得たる輪廓を胸に蔵して、凡(すべ)てを断ぜんとするものは、升(ます)を抱いて高さを計り、かねて長さを量(はか)らんとするが如き暴挙である。

自然主義なるものが起(おこ)って既に五、六年になる。これを口にする人は皆それぞれの根拠あつての事と思う。わが知る限りにおいては、またわが了解し得たる限りにおいては(了解し得ざる論議は暫(しばらく)く措(お)いて)必ずしも非難すべき点ばかりはない。けれども自然主義もまた一つのイズムである。人生上芸術上、ともに一種の因果によつて、西洋に発展した歴史の断面を、輪廓にして舶載(はくさい)した品物である。吾人がこの輪廓の中味を充(じゅうじん)するため生きているのでない事は明(あきら)かである。吾人の活力発展の内容が、自然にこの輪廓を描いた時、始めて自然主義に意義が生ずるのである。

一般の世間は自然主義を嫌っている。自然主義者はこれを永久の真理の如くに

いいなして吾人生活の全面に涉（わた）って強（し）いんとしつつある。自然主義者にして今少し手強（てごわ）く、また今少し根気よく猛進したなら、自（お）のずか）ら覆（くつがえ）るの未来を早めつつある事に気がつくだろう。人生の全局面を蔽（おお）う大輪廓を描いて、未来をその中に追い込もうとするよりも、茫漠（ぼうばく）たる輪廓中の一小片を堅固に把持（はじ）して、其処（そこ）に自然主義の恒久（こうきゅう）を認識してもらおう方が彼らのために得策（とくさく）ではなかるうかと思う。

——明治四三、七、二三『東京朝日新聞』——

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

入力：柴田卓治

校正：福地博文

1999年8月4日公開

2003年10月9日修正

青空文庫作成ファイル：

「美しくしき多くの人の、美しくしき多くの夢を……」と髯(ひげ)ある人が二たび三たび微吟(びぎん)して、あとは思案の体(てい)である。灯(ひ)に写る床柱(とこばしら)にもたれたる直(なお)き背(せ)の、この時少しく前にかがんで、両手に抱(いだ)く膝頭(ひざがしら)に陰(けわ)しき山が出来る。佳句(かく)を得て佳句を続(つ)ぎ能(あた)わざるを恨(うら)みてか、黒くゆるやかに引ける眉(まゆ)の下より安からぬ眼の色が光る。

「描(えが)けども成らず、描けども成らず」と椽(えん)に端居(はしい)して天下晴れて胡坐(あぐら)かけるが繰り返す。兼ねて覚えたる禅語(ぜんご)にて即興なれば間に合わすつもりか。剛(こわ)き髪を五分(ぶ)に刈りて髯貯(たくわ)えぬ丸顔を傾けて「描けども、描けども、夢なれば、描けども、成り

がたし」と高らかに誦(じゆ)し了(おわ)って、からからと笑いながら、室(へや)の中なる女を顧(かえり)みる。

竹籠(たけかご)に熱き光りを避けて、微(かす)かにもすランプを隔てて、右手に違い棚、前は緑り深き庭に向えるが女である。

「画家ならば絵にもしましよ。女ならば絹を粹(わく)に張って、縫いにとりましょ」と云いながら、白地の浴衣(ゆかた)に片足をそと崩(くず)せば、小豆皮(あずきがわ)の座布団(ざぶとん)を白き甲が滑(すべ)り落ちて、なまめかしからぬほどは艶(えん)なる居ずまいとなる。

「美しく多くの人の、美しく多くの夢を……」と膝(ひざ)抱(いだ)く男が再び吟じ出すあとにつけて「縫いにやとらん。縫いとらば誰に贈らん。贈らん誰に」と女は態(わざ)とらしからぬ様(さま)ながらちよと笑う。やがて朱塗の団扇(うちわ)の柄(え)にて、乱れかかる頬(ほお)の黒髪をうるさしとばかり払えば、柄(え)の先につけたる紫のふさが波を打って、緑り濃き香油の薫(かお)

りの中に躍（おど）り入る。

「我に贈れ」と髻なき人が、すぐ言い添えてまたからからと笑う。女の頬には乳色の底から捕えがたき笑の渦（うず）が浮き上って、臉（まぶた）にはさつと薄き紅（くれない）を溶（と）く。

「縫えばどんな色で」と髻あるは真面目（まじめ）にきく。

「絹買えば白き絹、糸買えば銀の糸、金の糸、消えなんとする虹（にじ）の糸、夜と昼との界（さかい）なる夕暮の糸、恋の色、恨（うら）みの色は無論ありましょ」と女は眼をあげて床柱（とこばしら）の方を見る。愁（うれい）を溶（と）いて鍊（ね）り上げし珠（たま）の、烈（はげ）しき火には堪（た）えぬほどに涼しい。愁の色は昔（むか）しから黒である。

隣へ通う路次（ろじ）を境に植え付けたる四五本の檜（ひのき）に雲を呼んで、今やんだ五月雨（さみだれ）がまたふり出す。丸顔の人はいつか布団（ふとん）を捨てて椽（えん）より両足をぶら下げている。「あの木立（こだち）は杖を卸

（おろ）した事がないと見える。梅雨（つゆ）もだいぶ続いた。よう飽きもせずに降るの」と独（ひと）り言（こと）のように言いながら、ふと思いついた体（てい）にて、吾（わ）が膝頭（ひざがしら）を丁々（ちようちよう）と平手をたてに切つて敲（たた）く。「脚氣（かっけ）かな、脚氣かな」

残る二人は夢の詩か、詩の夢か、ちよと解しがたき話しの緒（いとぐち）をたぐる。

「女の夢は男の夢よりも美しくしかろ」と男が云えば「せめて夢にでも美しくしき国へ行かねば」とこの世は汚（けが）れたり云える顔つきである。「世の中が古くなって、よごれたか」と聞けば「よごれました」と扇（あふせん）に軽（かる）く玉肌（ぎよつき）を吹く。「古き壺（つぼ）には古き酒があるはず、味（あじわ）いたまえ」と男も鷺鳥（がちょう）の翼（はね）を畳（たた）んで紫檀（したん）の柄（え）をつけたる羽団扇（はうちわ）で膝のあたりを払う。「古き世に酔えるものなら嬉（うれ）しかろ」と女はどこまでもすねた体である。

この時「脚気かな、脚気かな」としきりにわが足を玩（もてあそ）べる人、急に膝頭をうつ手を挙（あ）げて、叱（しつ）と二人を制する。三人の声が一度に途切れる間をククーと鋭どき鳥が、檜の上枝（うわえだ）を掠（かす）めて裏の禪寺の方へ抜ける。ククー。

「あの声がほととぎすか」と羽団扇を棄（す）ててこれも椽側（えんがわ）へ這（は）い出す。見上げる軒端（のきば）を斜めに黒い雨が顔にあたる。脚気を気にする男は、指を立てて坤（ひつじさる）の方（かた）をさして「あちらだ」と云う。鉄牛寺（てつきゅうじ）の本堂の上あたりでククー、ククー。

「一声（ひとこえ）でほととぎすだと覺（さと）る。二声で好い声だと思つた」と再び床柱に倚（よ）りながら嬉しそうに云う。この髯男は杜鵑（ほととぎす）を生れて初めて聞いたと見える。「ひと目見てすぐ惚（ほ）れるのも、そんな事でしょか」と女が問をかける。別に恥（は）ずかしく云う気色（けしき）も見えぬ。五分刈（ごぶがり）は向き直つて「あの声は胸がすくよだが、惚れたら胸は

痞（つか）えるだろ。惚れぬ事。惚れぬ事……。どうも脚気らしい」と拇指（おやゆび）で向脛（むこうずね）へ力穴（ちからあな）をあけて見る。「九仞（きゅうじん）の上に一簣（いつき）を加える。加えぬと足らぬ、加えると危（あや）うい。思う人には逢（あ）わぬがまだろ」と羽団扇（はうちわ）がまた動く。「しかし鉄片が磁石に逢（あ）うたら？」「はじめて逢うても会釈（えしやく）はなかる」と拇指の穴を逆（さか）に撫（な）でて澄ましている。

「見た事も聞いた事も無いに、これだなと認識するのが不思議だ」と仔細（しさい）い（らしく髯を撚（ひね）る。「わしは歌麻呂（うたまろ）のかいた美人を認識したが、なんと画（え）を活（い）かす工夫はなかるか」とまた女の方を向く。

「私（わたし）には——認識した御本人でなくては」と団扇のふさを織（ほそ）い指に巻きつける。「夢にすれば、すぐに活（い）きる」と例の髯が無造作（むぞうさ）に答える。「どうして？」「わしのはこうじゃ」と語り出そうとする時、蚊遣火（かやりび）が消えて、暗きに潜（ひそ）めるがつと出でて頸筋（くびす

じ)にあたりをちくと刺す。

「灰が湿(しめ)っているのか知らん」と女が蚊遣筒を引き寄せて蓋(ふた)をとると、赤い絹糸で括(くく)りつけた蚊遣灰が燻(いぶ)りながらふらふらと揺れる。東隣で琴(こと)と尺八を合せる音が紫陽花(あじさい)の茂みを洩(も)れて手にとるように聞え出す。すかして見ると明け放ちたる座敷の灯(ひ)さえちらちら見える。「どうかね」と一人が云うと「人並じゃ」と一人が答える。女ばかりは黙っている。

「わしのはこうじゃ」と話しがまた元へ返る。火をつけ直した蚊遣の煙が、筒に穿(うが)てる三つの穴を洩れて三つの煙となる。「今度はつきました」と女が云う。三つの煙りが蓋(ふた)の上に塊(かた)まって茶色の球(たま)が出来ると思うと、雨を帯びた風が颯(さっ)と来て吹き散らす。塊まらぬ間(うち)に吹かるときには三つの煙りが三つの輪を描(えが)いて、黒塗に蒔絵(まきえ)を散らした筒の周囲(まわり)を遶(めぐ)る。あるものは緩(ゆる)く、

あるものは疾(と)く遶る。またある時は輪さえ描く隙(ひま)なきに乱れてしまふ。「茶毘(だび)だ、茶毘だ」と丸顔の男は急に焼場の光景を思い出す。「蚊(か)の世界も楽じゃなかる」と女は人間を蚊に比較する。元へ戻りかけた話しも蚊遣火と共に吹き散らされてしもうた。話しかけた男は別に語りつづけようともせぬ。世の中はすべてこれだと疾(と)うから知っている。

「御夢の物語りは」とややありて女が聞く。男は傍(かたわ)らにある羊皮(よ)うひ)の表紙に朱で書名を入れた詩集をとりあげて膝の上に置く。読みさした所に象牙(ぞうげ)を薄く削(けず)った紙(かみ)小刀(ナイフ)が挟(はさ)んである。巻(かん)に余って長く外へ食(は)み出した所だけは細かい汗をかいている。指の尖(さき)で触(さわ)ると、ぬらりとあやしい字が出来る。「こゝう湿気(しけ)てはたまらん」と眉(まゆ)をひそめる。女も「じめじめする事」と片手に袂(たもと)の先を握って見て、「香(こう)でも焚(た)きましょか」と立つ。夢の話はまた延びる。

宣徳（せんとく）の香炉（こうろ）に紫檀（したん）の蓋があつて、紫檀の蓋の真中には猿を彫（きざ）んだ青玉（せいぎよく）のつまみ手がついている。女の手がこの蓋にかかったとき「あら蜘蛛（くも）が」と云うて長い袖（そで）が横に靡（なび）く、二人の男は共に床（とこ）の方を見る。香炉に隣る白磁（はくじ）の瓶（へい）には蓮（はす）の花がさしてある。昨日（きのう）の雨を蓑（みの）を着て剪（き）りし人の情（なさ）けを床（とこ）に眺（なが）むる荅（つぼみ）は一輪、巻葉は二つ。その葉を去る三寸ばかりの上に、天井から白金（しろがね）の糸を長く引いて一匹の蜘蛛（くも）が――すこぶる雅（が）だ。

「蓮の葉に蜘蛛下（くだ）りけり香を焚（た）く」と吟じながら女一度に数弁（すうべん）を攫（つか）んで香炉の裏（うち）になげ込む。「蛸（しようしよう）懸（か）かつて）不揺（うごかず）、篆煙（てんえん）邊竹梁（ちくりよう）をめぐ（る）」と誦（じゆ）して髯（ひげ）ある男も、見ているままで払わんとせぬ。蜘蛛も動かぬ。ただ風吹く毎に少しくゆれるのみである。

「夢の話しを蜘蛛もききに來たのだろ」と丸い男が笑うと、「そうじゃ夢に画（え）を活（い）かす話しじゃ。ききたくば蜘蛛も聞け」と膝の上なる詩集を読む気もなしに開く。眼は文字（もじ）の上花落つれども瞳裏（とうり）に映ずるは詩の国の事か。夢の国の事か。

「百二十間の廻廊があつて、百二十個の灯籠（とうろう）をつける。百二十間の廻廊に春の潮（うしお）が寄せて、百二十個の灯籠が春風（しゅんぷう）にまたたく、朧（おぼろ）の中、海の中には大きな華表（とりい）が浮かばれぬ巨人の化物（ばけもの）のごとくに立つ。……」

折から烈（はげ）しき戸鈴（ベル）の響がして何者か門口（かどぐち）をあける。話し手ははたと話をやめる。残るはちよと居ずまいを直す。誰も這入（はい）つて來た気色（けしき）はない。「隣だ」と髯（ひげ）なしが云う。やがて洪蛇（しづじゃ）の目を開く音がして「また明晩」と若い女の声がする。「必ず」と答えたのは男らしい。三人は無言のまま顔を見合せて微（かす）かに笑う。「あ

れは画じゃない、活きている」「あれを平面につづめればやはり画だ」「しかしあの声は？」「女は藤紫」「男は？」「そうさ」と判じかねて髯が女の方を向く。女は「緋（ひ）」と賤（いや）しむごとく答える。

「百二十間の廻廊に二百三十五枚の額が懸（かか）って、その二百三十二枚目の額に画（か）いてある美人の……」

「声は黄色ですか茶色ですか」と女がきく。

「そんな単調な声じゃない。色には直（なお）せぬ声じゃ。強（し）いて云えば、ま、あなたのような声かな」

「ありがとう」と云う女の眼の中（うち）には憂をこめて笑の光が漲（みな）ぎる。

この時いづくよりか二疋（ひき）の蟻（あり）が這（は）い出して一疋は女の膝（ひざ）の上に攀（よ）じ上（のぼ）る。おそらくは戸迷（とまど）いをしたものである。上がり詰めた上には獲物（えもの）もなくて下（くだ）り路（み

ち）をすらすら失うた。女は驚ろいた様（さま）もなく、うろろろする黒きものを、そと白き指で軽く払い落す。落されたる拍子（ひょうし）に、はたと他の一疋と高麗縁（こうらいべり）の上で出逢（であ）う。しばらくは首と首を合せて何かささやき合えるようであったが、このたびは女の方へは向わず、古伊万里（こいまり）の菓子皿を端（はじ）まで同行して、ここで右と左へ分れる。三人の眼は期せずして二疋の蟻の上に落つる。髯なき男がやがて云う。

「八畳の座敷があつて、三人の客が坐わる。一人の女の膝へ一疋の蟻が上る。一疋の蟻が上った美人の手は……」

「白い、蟻は黒い」と髯がつける。三人が斉（ひと）しく笑う。一疋の蟻は灰吹（はいふき）を上りつめて絶頂で何か思索している。残るは運よく菓子器の中で葛餅（くずもち）に邂逅（かいこう）して嬉しさの余りか、まごまごしている気合（けわい）だ。

「その画（え）にかいた美人が？」と女がまた話を戻す。

「波さえ音もなき朧月夜（おぼろづきよ）に、ふと影がさしたと思えばいつの間（ま）にか動き出す。長く連（つら）なる廻廊を飛ぶにもあらず、踏むにもあらず、ただ影のままにて動く」

「顔は」と髻なしが尋ねる時、再び東隣りの合奏が聞え出す。一曲は疾（と）くにやんで新たなる一曲を始めたと見える。あまり旨（うま）くはない。

「蜜を含んで針を吹く」と一人が評すると

「ビステキの化石を食わせるぞ」と一人が云う。

「造り花なら蘭麝（らんじゃ）でも焚（た）き込めばなるまい」これは女の申し分だ。三人が三様（さんよう）の解釈をしたが、三様共すこぶる解しにくい。

「珊瑚（さんご）の枝は海の底、薬を飲んで毒を吐く軽薄の児（じ）」と言いかけて吾に帰りたる髻が「それぞれ。合奏より夢の続きが肝心（かんじん）じゃ。

——画から抜けだした女の顔は……」とばかりで口ごもる。

「描（えが）けども成らず、描けども成らず」と丸き男は調子をとりて軽く銀椀

（ぎんわん）を叩（たた）く。葛餅を獲（え）たる蟻はこの響きに度を失して菓
子椀の中を右左（みぎひだ）りへ馳（か）け廻る。

「蟻の夢が醒（さ）めました」と女は夢を語る人に向って云う。

「蟻の夢は葛餅か」と相手は高からぬほどに笑う。

「抜け出ぬか、抜け出ぬか」としきりに菓子器を叩くは丸い男である。

「画から女が抜け出るより、あなたが画になる方が、やさしゅう御座んしょ」と女はまた髻にきく。

「それは気がつかなんだ、今度からは、こちが画になりましたよ」と男は平気で答える。

「蟻も葛餅にさえなれば、こんなに狼狽（うろた）えんでも済む事を」と丸い男は椀をうつ事をやめて、いつの間にやら葉巻を鷹揚（おうよう）にふかしている。

五月雨（さみだれ）に四尺伸びたる女竹（めだけ）の、手水鉢（ちようずばち）の上に蔽（おお）い重なりて、余れる一二本は高く軒（せま）れば、風誘う